



TITLE:

ヘーゲル史觀の實踐的構造(二)完

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. ヘーゲル史觀の實踐的構造(二)完. 經濟論叢 1933, 36(5): 782-802

ISSUE DATE:

1933-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130314>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五號

第三十六卷

昭和八年五月一日發行

論叢

國有鐵道の民營化……………法學博士 神戸 正雄
生産力の自己運動……………文學博士 高田 保馬
ヘーゲル史觀の實踐的構造……………經濟學博士 石川 興二

時論

昭和八年度豫算より財政計畫……………法學博士 小川 郷太郎

研究

獨占産業組織の社會的影響……………經濟學士 大塚 一朗
平均利潤率再論……………經濟學士 柴田 敬

說苑

中心都市における工業集積……………經濟學士 菊田 太郎
英米兩國所得稅の特徴……………經濟學士 佐伯 玄洞

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

ヘーゲル史觀の實踐的構造 (二)完

石 川 興 二

目次

- 一、社會的實踐を基礎付ける實踐哲學の要求
- 二、實踐的認識主觀の立場より靜觀的認識主觀の立場へのヘーゲルの轉向
- 三、ヘーゲル史觀の實踐的構造
 - (一)ヘーゲル史觀の根本命題
 - (二)ヘーゲル史觀に於ける究極因としての自由(以上本誌前號掲載)

- (三)ヘーゲル史觀に於ける動力因
- (四)ヘーゲル史觀に於ける形相因
- (五)ヘーゲル史觀に於ける世界史の行程
- 四、結論 國民精神史觀の確立と現代社會問題論の具體化

三、ヘーゲル史觀の實踐的構造

(三)ヘーゲル史觀に於ける動力因

次に、ヘーゲルは、神が自己の本性としての理念を世界史的場面に實現する爲めに用ゆる手段 Mittel 即ちそれによつて、神の内面的生命が世界史的事實として表現されるところの動力因について述べて居る。即ち前述せし究極目的たる自由はそれ自身としては未だ内的なものであるが故にこれが實現されねばならない。この實現の動力因は人間の活動である。この活動の舞臺に於て主要なる動因となるものは人間の激情 Leidenschaft である。なるほどそこには一般的の目的、善意、高尚な愛國心等が働いて居るが、それは世界史に對しては重要な關係に立つものではない、

「これに反して激情即ち特殊な關心の目的、自己の情欲の充足は最も強力なるものである。此等のもつ力は、法や道德が置く如何なる制限をも無視する點に於て、また此等自然的強力が秩序、中庸、法、道德に對する人爲的な長々しい訓練よりも遙に人間に近いものである點に存する」かくて「全個性が、總ての他の關心並に目的を顧みず、彼に内在する意思の全血管を以て或對象に没入し、この目的に總ての欲求と力とを集中する限り、一つの關心を激情 *Leidenschaft* と名付けるならば、我々は一般にかく云はなければならない。世界に於ける如何なる偉業も、激情なしには爲し果げられなかつた。」

かゝる人々は哲人ではないが實踐人である。即ちかゝる個人はこの彼等の目的に於て理念一般 *der Idee überhaupt* の意識を持つて居るのではなく、彼等は實踐的政治的人間 *praktische und politische Menschen* であつた。然し同時に彼等は思惟する人間 *denkende Menschen* であつて何が必要であり而して爲さるべき時期に達してゐるかについて洞察をもつてゐる。それが正に彼等の時代並に彼等の世界の眞理 *die Wahrheit ihrer Zeit und ihrer Welt* である、云はく世界精神の内部に於て既に用意されて居るところの次の段階である。彼等の仕事は此一般的なるもの彼等の世界の必然的な次の段階を知ることであり、これを自分にとつて目的とすることであり而して彼等の精神をこの目的に傾注することである。かゝる人をヘーゲルは「世界史的個人」又は英雄とよんで居る。而してこの偉人の他の人々に對する關係については次の如くに云ふて居る。即ち偉大

な人間は他人を満足させる爲めではなく自己を満足させる爲めに意欲した。而してこの進んで居る精神は總ての他の個人の内的な心であるが而もそれは無自覺な内面性であつて、それを彼等に自覺にもたらしのはこの偉大なる人々である。それ故に他の人々はこの心の案内者に隨ふ、何となれば彼等は彼等に對立する自らの内的な精神の抗し難き力を感ずるが故である。

かゝる英雄は世界精神の手段であるが故にその仕事が濟めば「核實の空虚なる皮の如くに脱落して了ふ」彼等はアレクサンデルの如く早死し、ケーザルの如く刺され又ナポレオンの如く流される。かくて世界精神の代理人たる職分を有したかゝる世界史的個人」の運命は決して幸福なものではない。世界精神又は理性は、この英雄の特殊的關心、激情によつて次へ次へと實現の段階に達した自己の理念を實現する。かくて特殊的なるものは理想を實現するが爲めに相争ひ相滅して行くのであるが一般的理性は何等障害を受けることなく背後に嚴然として控へてゐる。これ「理性の狡智」である。ナポレオンは同時代の英雄としてヘーゲルの思想を特に規定してゐる。

觀想的認識主觀の立場に立つたヘーゲルにとつては、かくの如く、英雄なるものはどこまでも神の傀儡であつて、神が必然的に實現せんとするところのものを實現するにすぎない。これに反して實踐的認識主觀の立場に立てるマルクスにとつては社會變革の動力因は社會を變革せんとする哲學者であつて哲學者は現實を分析批判することによつて社會變革の學的基礎を確立しこれを以てプロレタリアートを自覺せしめこのプロレタリアートを通じて自己の哲學を實現しかくて

プロレタリアートを解放するところのものである。¹⁾而も尙ほヘーゲルに於ても社會變革の動力因として秀れた個人を重んじて居ることは注意すべきである。

かくの如く社會變革の動力因として偉人を重んずることは正しいのである。即ち人類の發展段階が幼稚であり無自覺である程社會の變革は無自覺的偶然的暴力的に行はれる。而してこの意識が無自覺であるにもかゝらず變革の結果が成功するとすればそれは偶然的であつて、むしろ多くの失敗を伴ひ勝である。而して人類の發展段階が進む程この變革の意識は自覺的となる。而もこの自覺の中心點となるものは即ち青年マルクスの云ふ哲人である。この哲人が歴史發展の本質的構造を把握せし時この哲學によつて彼は社會の變革を支配し得るに至るのである。従つてその變革は自覺的となりその結果を完ふし得るのである。これ眞に人間的なる社會變革である。かくて社會變革の最も具體的な動力因はかゝる實踐哲學者とこの實踐哲學者によつて自覺せしめられたる人々であると云ふことが出来るであらう。

(四)ヘーゲル史觀に於ける形相因

世界精神は自己の本性たる自由の自覺の爲めに(究極因)、英雄によつて(動力因)、何を(形相因)實現するか、この形相因が次の問題である。即ち世界精神は世界史の場面に於て如何なる實現の形態をとるか云ふことである。この形相は實現されたるものとしては、アリストテレスに於けるが如く、實體と云ふことが出来る。ヘーゲルに於てはこの實體は國家 Staat である。即ち

1) 拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』(本誌第三十四卷第一號)參照。

「國家とは地上に存在するところの神の理念である。」即ち英雄の偉大なる「世界史的激情」の中には、既に述べしが如く、世界精神の一般的本質的なものがある。これが實現せられたるときそれが國家である。

かくて先づ國家なるものは神の自由の實現であると共に世界精神の一般的意思と國民たる個人の主觀的意思との合一せる具體的存在であつてヘーゲルに於ける人間の自由はこゝに於てのみ存するのである。即ち「自由は國家の内に於てその客觀性を保持しこの客觀性を樂しむ。何となれば法律は精神の客觀性でありその眞實に於ける意思である、而して法に従ふ意志のみが自由である何となれば、國家即ち祖國が存在の共同性を形成し、人間の主觀的意志が法に従ふことによつて自由と必然との對立は消滅する。理性的なるものは實體的なものとして必然的であり而して我々は實體的なものを法として承認し我々自身の存在の實體としてこれに隨ふことによつて自由である。かくて客觀的意志と主觀的意志とは融和せられ同一の混りなき全體となる。」即ち人間の「自然狀態は寧ろ不法、暴力、抑制されざる自然衝動による殘酷な行爲感情の支配する狀態である」が社會及び國家の制限が媒介となつて眞實の自由の意識及意志が始めて生産される。かくて「自由にはその本質上法と人倫とが必ず屬さなければならない。」かくて世界精神の「實體的なものが人間の實際の行爲及び人間の心情に於て妥當し、存在し、持續すると云ふことこれが國家の目的である。」

かくてまた人間はその有する總ての價值即ち精神的實在を只だ國家によつてのみ有するのである。従つて國家は國民生活の具體的面である藝術、法律、習俗、宗教、科學等の基礎であり中心點である。而して總ての精神的行爲は世界精神の客觀的意志と個人の主觀的意志との合一を意識するところの唯一の目的を有する。かくてこゝに宗教、藝術、哲學の本質がこの點より考察されて居る。

更にヘーゲルは國家組織がこれ等一切の國家的實在と個性的統一にあるべきことを高調して居る。即ち「一國民の政治組織がその宗教、藝術、哲學又は少くともその諸觀念並に思想その教養一般（更に進んで其他の外的諸力即ち氣候、隣國、世界的地位については述べないとするも）と共に一つの實體、一つ、精神 eine Substanz, einen Geist を形成して居る」即ち「一つの國家は一つの個性的總體である (Ein Staat ist eine individuelle Totalität) それからたとひ最も重要であらうが特殊的な面例へば國家組織を獨立にそれのみを取出し、それだけに關する考察によつてそれに関連して獨立しそれにつき考慮し撰定し得ない」。而して一國民に於てこの一切を統一してゐる原理は其國民精神である。このことについてはヘーゲルは後段に於て更に詳に論じて居るが故にこれを後に譲る。

今このヘーゲル史觀に於ける形相因を青年マルクスの實踐哲學に於ける形相因と比較して見よう。先づヘーゲルに於ける形相因は國家であるが、マルクスに於ては國家なき人類的社會である

こゝにヘーゲルの獨逸的精神とマルクスのユダヤ的精神とが最も強く對立する。即ちヘーゲルは人間は國家に於てのみ人間となり得ると考へマルクスは國家を少數の支配者が多數の民衆を搾取壓迫する機關であると考へる¹⁾。而もヘーゲルがさきに國家の本質として擧げたところのものに於ては國民の主觀的意志と國家の客觀的意志とが合一した狀態である、かゝる狀態を徹底して考へればそこに於ては全體の意識と部分の意識とは完全に内面的に融合して國家權力の壓迫と云ふものは考へられ得ない。即ちそれは一つの理想社會であつて、この點に於てはマルクスが將來社會として考へて居る「自由の王國」²⁾と本質的に變りない。只だヘーゲルが事實其國家論に於て基礎づけは認して居るところのものは當事のプロシヤの反動的獨裁國家であるが故に、これに對してマルクスは極力反駁を加へて居るのである。

觀想的認識主觀の立場に立てるヘーゲルに於ては國家が形而上學的存在となつて居る、而もその國家論に於て國家的存在の具體性を重する點は特に重要である。即ち社會の形相を考へるに當りヘーゲルは國民性的統一¹⁾を重んずるが、マルクスはこれを見做せんとする。かくてマルクスの將來社會の形態はコスモポリタンの本質を有するものとなるに反し、ヘーゲルに於ては社會の形態は國家的實在の全體との個性的統一に於て考へらるべきこととなる。このヘーゲルの考が現代の實踐哲學に於ける形相因の論に對し甚だ重要なることは更に後に詳にする。

(五) 世界史の行程

1) Marx, Deutsche Ideologie 參照。

2) 拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』參照。

ヘーゲルは以上述べ來つた世界史の究極因、動力因、形相因を統一して世界史の發展的構造を明にして居る。その中に於て世界史の素材因も自ら明にされて居る。

彼は先づこゝに世界史の發展の原理を自然との比較に於て抽象的に述べ居るが、このことは後に更に具體的に述べられて居るが故にこゝには省略する。只だこれを一言にして云へば、精神の發展は創造的辯證法的發展であると云ふことである。

次に彼は歴史の端初について述べて居る。こゝに彼は *Vorgeschichte* 前史と *Geschichte* 歴史とを分つて居る。而もその區分の標準を國家の出現に於て見て居る。即ち各國民は國家なる規定を達成するに至る以前國家なしに永い間生活を續けて來ることが出來た。然し「哲學的考察にとつては理性的なるものが世界史的存在に入り込み始めるところから、歴史を始めることのみが適當なまた價值あることである。」即ち歴史 *Geschichte* なる語は主觀的面並に客觀的面を統一して居て、なされたこと、記錄をもなされたこと、自身をも意味して居る。歴史は出來事、物語と共に出來事である。この二つの意味の統一は單なる外的偶然性以上のものである。即ち出來事の物語は本來起つた行爲並に事件と同時に現れると考へなければならぬ。この兩者を一緒に成立せしむるところのものは一つの内面的な共通的基础即ち國家である。國家の成立と共にそれまで即自的な可能性に止まつてゐた世界精神が始めて世界的存在に現れはじめるのである。この「法律の意識をもつ國家に於て始めて明晰なる行爲が存在し、それと共に行爲についての意識の明晰が存在す

る。此明晰さが、此行爲をかく保存する能力と要求とを與へる。」かくてヘーゲルに於ては *Vorgeschichte* と *Geschichte* との區別を國家の成立に於て見るのであるが、マルクスに於ては今日までの人類の歴史を總て *die Vorgeschichte der Menschlichen Gesellschaft* 人類社會の前史となし資本主義制度の止揚を以て始めて *Menschliche Geschichte* 人類史がはじまるとする。この點に於てもマルクスを支配せるものは「自由の王國」を將來せんとする實踐的變革的な興味であり、これに對してヘーゲルを支配せるものは國家的存在を基礎付けんとする靜觀的な興味であると云ふことが出来るであらう。

此前史の後に來る歴史時代をヘーゲルは常に三段階に分つてゐる。即ち第一は精神が自然性に沒入せる段階であり、第二は精神が自由の意識に進展せる段階であるが、然しこの段階に於ては精神の自然よりの分離は未だ十分でなく自然性を一契機として含んで居る。從てその自由は特殊的自由である。第三は此の特殊的であるところの自由から自由の純粹一般性へ即ち精神性の本質の自意識自己感情へ超脱した段階である。ヘーゲルはこの三つの段階の進展を「一般的過程の根本原理」であるとして居る。從つて世界史全體については東洋、希臘羅馬、ゲルマン、の三段階がこれであるとなし、更にこの全世界史の發展の契機をなす各國民の發展についてもこの三段階を認めてゐる。このことは以下に於て詳にされる。

かくて次にヘーゲルは世界史の經過の仕方並に歴史的進歩について詳述して居る。既に述べら

れたが如く、世界史は精神の自由の意識並にかゝる意識によつてもたらされる現實化の發展を示すものである。而して發展は自由の進んで行く諸規定の段階行程である。この段階の各は他のものと異なるものとして特定な固有の原理をもつ。即ち「かゝる原理は歴史に於て（世界）精神の規定性即ち特殊の國民精神である。此國民精神に於て（世界）精神は具體的なものとしてその國民の意識並に意志、その全實在の總ての面に表はれて居る。この國民精神がその國民の宗教、政治的組織、人倫、法制、風習の、更にまたその科學、藝術並に技術的才能の共通的な特色となる。」即ち一國民の存在の全體はその國民精神によつて特色づけられるのである。

彼はかくの如き國民精神の特色を無視せんとする形式主義 Formalismus の誤謬を指摘して居るこの點はさきにマルクス自身についても一言せしところであるが、今日の所謂マルクス學派について特に關係深きものである。即ちヘーゲルは次の如くに述べて居る。天才、才能、道德的美點、道德的感情、敬虔心があらゆる地帶、あらゆる社會組織、あらゆる政治狀態の下に於て見出され得ると云ふことによりそれらの中に見出される區別が重要ならざるもの又は本質的なならざるものとして卻けるとすれば、それは形式的な諸見地内に於て働いて居る智的な立場である。この同じ形式主義が天才、詩又哲學をも無規定的一般性に於て取扱ひ、かゝる無規定的なものを到るところに於て見出す。なるほど世界史的諸民族に於てはこれ等のものがその何れに於ても存在して居る、「然し様式傾向一般が異なるのみならず、更に内容を異にするものであり、この内容

は最も重要な區別、即ち理性的性質の區別に關係するものである。」

かくの如くヘーゲルが『歴史哲學』に於ては各國民文化の個性を重んじ、而も『精神哲學』『法律哲學』に於てはこれ等諸種の實在の一般性を重んじて分析せる態度は甚だ適切なるものと云はねばならない。これを經濟學史上について見ればリカルドウ學派並にマルクス學派は形式主義に陥り文化の共通性を高調するに急にして個性の相異を輕視せんとし、他方歴史派は歴史に於ける個性を單に各國民文化の特殊性 *Besonderheit* と考へ普遍性を輕視する缺點に陥つたのである。

扨て次にヘーゲルは世界史に於ける精神の辯證法的發展を詳にして居る。而してこれを理解することを、「歴史の把握に於ける最も重要なことである」として特に重んじて居る。

怪鳥フエニックスは自ら積薪の用意をし、それに火を點じて自らを燒き盡しかくてその灰の中より常に新しき若返れる生命として甦る。然るに精神は前の灰の中より若返つて甦るのみでなく高められたる光明に充され、より自由なる精神として現れる。即ち精神は自己の生存を食ひつくして消化し、かくて生じたより高き段階は更に次の段階の消化の材料 (*Material*) となりかくして高まつて行くのである。然らばこのことは如何にしてなされるか。「精神の眞の本質は行ふことである。精神は自己が即自的にあるところのものに自己を實現せんとし、自己の行爲自己の仕事にまで自己を實現せんとする。かくて精神は自身に對する對象となる。かくて精神は自己を客觀的存在として眼前にもつ。或る國民の精神に就ても同様である。その精神は、現にその宗教、その

敬神、その習慣に於て、その國家組織、國家の法律に於て、又その制度の全範圍に於て、その事件及び行爲に於て存在して居るところの現存世界に自己を作り上げるところの特定の精神である。」これ國民精神發展の第二段階であつて國民精神は自己の特殊的原理を現實的存在に實現し完成するのである。

かくなれば精神は自己の欲するものを既に獲たのである故に精神のこの活動はもはや必要でなくなる。これはもはや事柄に心をうちこむことを止めた状態である。かくして個人は自然死を遂げると同様に國民も自然死を遂げる。若し國民が生き残るとしても、それは無關心な活力なき存在である。然しながらかく實現完成の極點に到達したところの國民精神は單に自然死をとげるものではなく、その中より新しき原理が現れるところのものである。即ち「精神がその仕事に於て志して居るのは自己を對象としてもつと云ふことである。然るに精神が自己をその實體性に於ける對象としてもつのは、唯だ精神が自らを思惟する場合に限られる。かくして精神は此點に於てその原理、即ち行爲の一般的性質を知るのである。然るに思惟のかゝる產物は一般者として、現實の產物からかゝる產物を生ぜしめた活動的生活からも形式上異なるものである。今や實在的存在と理念的存在とが存在する。」これ國民精神發展の第三段階即ち精神が特殊的なる國民精神の自覺から精神性の一般的本質の自覺へ高まる段階である。かくて若しギリシヤ人が如何なるものであつたかと云ふことの一般的觀念と思想とを我々が獲得せんとするならば、我々はこのこと

をソフォレクス、アリストファネス、ツキデデス、プラトキンの中に見出すであらう、これ等の個人に於てギリシャ精神は自らを思惟し表象したのであると述べてゐる。

かくる時代は觀念の支配する時代である、而して觀念なるものは、國民精神發展の第二段階が完成せしところの諸種の國家的實在が内容上特殊的にして無反省なるものであり制限されたるものであることを明にして個人を全體より引き離なしかくて個人主義時代を將來する。即ち「こゝに個人相互の孤立及び全體からの個人の孤立、個人の侵略的我儘や自負心、自己の利益を求め全體の利益を犠牲にしてまでもその満足を求めることが現れる。即ちかく互ひに孤立する内面的原理も亦主觀性なる形式に於てある、即ちそれは人間の抑制されない激情や個人的關心に於ける我儘と墮落である。」かくて國家的實在は亡びて行く。

「かくて世界史の經過の成果は、精神が自己の存在を思惟することにより、一方に於ては自己の存在の規定性を破壊し、他方に於てはその存在の一般者を捕捉し、かくしてその原理に新しき規定を與へると云ふことである。之を以て此の國民精神の實體的規定性は變化せられた、即ちその原理が他のしかもより高き原理に高められたのである。」かくてこのより高き原理を受取れた新なる國民は前の國民に代つて支配的世界に於ける支配的地位に上つて来る。世界精神はこの過程を繰り返へして自己の自由を實現して行くのである。

かくて「必然的な發展の段階に於ける國民精神の各原理はそれ自ら一の一般的精神の契機に過

ぎない。その一般的精神はこの原理を通じて歴史に於て自己捕捉的總體 *eine sich erfassende Totalität* にまで高まり完結するところのものである。」かくて今や世界精神は個人と國民との一切を手段とし犠牲として自己の爲めに自由を實現し了へたのである。

ヘーゲルは次の語を以てこの節を終つて居る。即ち「現在の精神の生命は、一方に於てはなほ併列的に存立し他の見地から見られた場合にのみ過ぎ去られるものとして現れるところの諸段階の一廻りである。精神がその後に残して來たやうに見える諸契機を、精神はまたその現在の奥底に於て有して居る。」

以上がヘーゲルの世界史の辯證法的發展の思想であるがマルクスはこのヘーゲルの辯證法的發展の根本思想を其最も貴重なるものとして自己の思想に取り入れたのである。而もヘーゲルの形而上的立場をすてこれを現實にかへさんと努めたのである。かくてヘーゲルの精神の辯證法的發展はマルクスに至つて經濟的生產力の辯證法的發展となつた。従つてまたヘーゲルの國家の地位をマルクスに於ては經濟的生產關係がとつた。然し發展の形式は同様に辯證法的である。即ち生産力は其發展段階に相應した生産關係を取つて自己を發展せしめるが、その發展が或一定の段階に達するならば其生産關係はこの生産力に對する束縛となる。かくてこの生産力はこの生産關係を打破つて新なる生産關係を取り、そのもとに於て新なる發展を果げるのである。この際新なる段階の發展の原動力が舊き段階の中に於て準備せられる點もヘーゲルに於けると同様である。¹⁾

1) Marx, Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.

而もこの辯證法的發展の形式に於て異なる點がある。即ちヘーゲルに於ては世界史の支配的國民は順次に交代し舊きものが亡んで新なるものが高まつて來るのであるがマルクスに於てはかくの如き新陳代謝は必要ではないのであつて各國民は併存して生産力と生産關係との辯證法的發展段階を經過して發展し行くのである。かくてヘーゲル史觀の具體的展開に於ては東洋は西洋の土臺とし踏石としてあり西洋諸國は獨逸國民への段階としてあることとなり而してプロイセンの專制君主制體が世界史的全體地盤の上に基礎付けられることとなる。こゝにギリシヤが亡んでローマが興り、ローマが亡んで西歐諸國が興つた西洋史の體驗を中心とする西洋人の而も「Deutschland über alles」(世界に冠たる獨逸)なる國歌を叫ぶ獨逸人の自尊的生命の歴史觀的表現を見る。

かくヘーゲルの精神的辯證法とマルクスの物質的辯證法とは相對立するが如く見えるが而も眞に具體的な實踐的認識主觀の立場に立てば、兩者はより具體的な史觀の内に止揚せられることとなる。即ち先づ今日の世界史に於てはむしろマルクスに於けるが如く各國民は並列的に發展すると考へることが一層適當であらう。而してこの諸國民の各のものにつきその發展の各段階に於てヘーゲルの云へるが如き精神の辯證法的發展關係を見ることが出来るであらう。例へば我國の歴史に於ては今日まで文化の諸段階が連綿として發展し來つたのであるが、徳川封建期の末に至り當時の國家的現實を思惟し批判せし結果產出せられたる一般的思想が、明治時代を建設すべき新なる原理となつたのである。而もこの日本は英、獨等と並列して存立し而して互に自己の

國民個性に特有なる原理を以て互を刺撃し其發展を促進し合ふことが出來たのである。例へば我國は明治の建設にあたつて獨より國家主義を而して英より資本主義を取入れたのである。而して現代の社會變革期に於てもまた所與的現實在を批判することにより高き社會生活の精神的原理が產出されつゝあるのである。

然しながらより高き精神的原理が新なる社會段階として實現する爲めには物的基礎が必要である。これヘーゲルが家族成立の物的基礎として財産を必要とする¹⁾と全く同様である。而してより高き社會の物質的基礎はマルクスの云へるが如くより進歩せる經濟的生産力であると云ふことが出来る。かくて社會の變革期に於ては新なる社會の成立すべき精神的並に物質的基礎が既に舊き社會の中に於て準備されて居らねばならぬ。而もこの精神的原理となるところのものは、所謂唯物史觀の公式に於けるが如く、社會的存在に規定された受味の意識よりではなく、現實の社會存在を積極的に批判する意識より出づべきものである。即ち批判と云ふことは現實の社會存在を媒介としてより高き社會的原理に達することである。この批判の構造はヘーゲルの國民精神發展の第三段階に於て最もよく説かれて居る。かゝる意味に於て一つの段階より次の段階への發展は「意識と意志とによりて媒介せられる」と云ふことが出来る。青年マルクスに於ける世界を變革する哲學者なるものも舊き社會を批判して新なる社會への原理を把握するかくの如き意識である。かくて青年マルクスは社會變革の基礎として哲學的原理を重んじたと共にまた其物的の基礎とし

て生産力を重んじたのであつてこの點に於ては最も具體的な立場に立つたと云ふことが出来る。これに對してヘーゲルはより高き社會への精神的基礎を高調したが物質的基礎を考へて居ない點に於て抽象的である。また後年のマルクスは社會變革の基礎として物的基礎と意識的基礎を共に重んじて居るが、而もこの意識的基礎は經濟的生產關係に規定せられるプロレタリアートの意識であつて、青年マルクス及ヘーゲルに於けるが如く哲學的意識を十分重んぜざる點に於て抽象的であると云はねばならぬ。而も『資本論』に於て物質的基礎の分析を進めたことは大なる功績である。かくて我々はヘーゲルの精神の辯證法へマルクスの物質的辯證法を止場しより具體的な史觀に進まねばならぬ。

四、結論 國民精神史觀の確立と現代社會問題論の具體化

扱てかくの如くヘーゲルの精神的辯證法へマルクスの物質的辯證法を止揚してより具體的な辯證法的史觀に進むが爲めには、先づ實踐的認識主觀の立場に立つてヘーゲル史觀に於ける神の歴史を人間の歴史に引き下さなければならぬ。抑もヘーゲル史觀に於ける主體は形式上神であるが實質上は國民精神である。彼は秀れた歴史研究に於て各國民の精神を具體的に把握したのであつて、神はむしろこれら諸國民精神を統一するものとして置れてゐると見ることが出来る。故に實踐的認識主觀の立場に立つヘーゲル史觀を見直すならば國民精神史觀を確立し得る。而もヘーゲルはかくの如き契機を彼の史觀の中に於て與へて居るのである。

先づヘーゲルは、以上の論につゞくところの『世界史の地理的基礎』に於て次の如くに述べて居る。即ち既に述べたるが如くヘーゲルに於ては國民精神なるものはその第一の發展段階に於ては自然の中に没入せる状態にあるものであるが、かゝる状態に於ては國民精神は自己の特殊の原理を自然的規定としてその中に有し云はゞ自然性なる衣に身を包んで居るのである。然るにこの自然なるものは特殊の諸形態に分裂して居る。かくて自然の類型を知ることが必要である。「何となればこの自然類型こそ、かゝる地盤の子たる國民の類型並に性格と密接に聯關するものだからである。此性格は正に諸民族が世界史に於て如何に現れ、その中に於て如何なる地位と場所とを占めるかと云ふ仕方に外ならない。」と述べて居る。

更に彼は「自然は餘りに高く評價されてもならないと同様に餘りに低く評價されてもならない。」と述べ、温和なイオニアの空は確かにホメロスの詩の優美さに貢献した。然しかゝる空だけではホメロスは出ないトルコの統治下に於ては一人の詩人も現れなかつたと述べて居る。而してこのヘーゲルは國家形態を論ずるに當つて「國家に屬する各個人をして生命あらしめる國家の大切な原理は人倫と名づけられた。國家、その法律、その制度は國民の權利である。國家の自然、地面、山嶽、空氣、河川は國民の土地、國民の祖國、國民の外形的財産である。此國民の歴史は國民の行爲であり、國民の祖先が造りしものは國民に屬し、その記憶に於て生命を保つ。それは丁度彼等がそのすべてにより所有されて居る如くに、すべては彼等の所有である。何となればこ

れ等すべては國民の實體、その存在を構成して居るからである。國民の觀念はこれらすべてのものによつて充されて居り、その意志はこれらの法律この祖國の意欲である。一國民の本質、精神をなすものは此の成熟せる總體である。國民の本質には各個人が屬して居る。各個人はその國民の子であり同時に彼の國家が發展の過程にある限り、彼の時代の子である」と述べて居る。

ヘーゲルに於てはこの一切が神の實踐の立場より云はれて居るのであるが今この語を人間の實踐の本質より見直して、一民族なるものは特定の形態を有する自然の制約下に於て特有の文化を形成しこの文化を理解しながら其固有の性格を發展せしめ行くものであると考へる時、かく血と自然と歴史とに基礎付けて國民性なるものを見る時、各國民はその血と自然と歴史との異なるにより各々異なる國民精神を形成發展せしめることとなる。而してこの相異なる國民精神を有する諸國民は、相併存して互に精神的原理と物質的生産力の原理を以て刺戟し合ひ、各自の精神的原理をその物質的生産力の上に實現し相異なる文化を創造しながら辯證法的に發展して行くのである。かくて人類全體の文化を益々豊にして行くことが世界史の本質的發展である。かくて神の自由の實現の爲めに一切の個人をも國民をも只だ手段とし犠牲として進むヘーゲルの神の實踐史觀は、今やマルクスの唯物史觀も其中に止揚し、眞に具體的な國民精神史觀として確立され得るのである。

ヘーゲルは其『歴史哲學講義』の本論に於て、この神的實踐史觀に立つて、世界史を見て居るのであるが、この世界史がまた此具體的史觀より見直されねばならない。

1) 既に國民精神の基礎が相異なる血と自然と歴史とに置かれる以上マルクス學の派に於るが如く社會の經濟組織が世界的になると云ふ根據を以て容易に其の相違を否定し得るものではない。

かくの如くヘーゲルは其史觀の中に具體的史觀の基礎を與へて居るのみならず、またかくの如き國民精神史觀を確立する爲めに各國の國民精神を把握するところの認識論的基礎をも與へて居る。即ち彼は次の如くに述べて居る。

「國民精神は、その國民の宗教、政治的組織、人倫、法制、風習の、更にまたその科學、藝術並に技術的才能の共通的な特色となる。これ等のものゝ特殊な固有性ほかの一般的固有性即ち一國民の特殊原理から理解 (Verstehen) するべきであると共に、逆に歴史に於て見出されるところの事實的な詳細な事柄から、かの特殊性の一般的なるものが見出さるべきである。特定の特殊性が事實一國民の特有な原理を成すと云ふことは經驗的に認められ歴史的な仕方で證明されねばならない。」

即ちこの認識方法は今日精神科學に於て Verstehen 理解として重んぜられるところのものである。即ち與へられし諸表現 Ausdruck を基礎としてこれを通じてその表現をなせし生命 Leben を把握し更にこの生命より與へられし諸表現を理解する Verstehen 仕方であつて、そこには非難せらるべき意味に於ける Apriorismus はないのである。而して更に我々は、さきに引用せしヘーゲルの語に於けるが如く、この國民的生命をその自然と歴史との一體として更に具體的に把握することが出来るのである。かくの如くにして具體的な國民精神史觀を確立しこの立場に立つて世界史を國民的聯關に於て把握するならば、この上に於て現代各國民の社會問題及び其全體に於ける世界社會問題の考察を具體化し得るのである。こゝにはかくの如き史觀の各國民の社會問題論に

對する意義を一應考察し以てこの論を結ぶこととする。

以上全體の論に於て私はヘーゲル史觀の實踐的構造を分析し、これを實踐的認識主觀の立場より批判することによつて社會的實踐を基礎付ける實踐哲學について考へたのである。而して以上述べ來りしところに於て明なるが如くこの廣義の實踐哲學はその中に史觀を含んで居らねばならない。即ち社會を變革せんとするものは先づ所與的なる歴史的社會的實在の本質的一般的構造を把握しなければならぬのであるが、これ即ち歴史觀である。かくて把握されたる所與的實在の構造即ち素材因の智識に基いて、この實在を發展 Fortsetzung せしむべき目的因、形相因、動力因の智識が成立つのである。而し實踐的認識主觀の立場に立つものはこれ等四原因の智識を單に一般的性質に止めて置くことは出来ない。何となれば變革さるべきものは常に歴史的個性的なる實在であるからである。即ち更にこれ等の一般的智識を個性化さなければならぬ。この個性化の原理は、以上のヘーゲルの論より明なるが如く、國民精神の原理である。然るに今日社會問題の解決を基礎付くべき學科的考察に於ては、後年のマルクスに於ける所謂唯物史觀の立場が支配的である。而もこの立場は前述せしが如くヘーゲルの非難せる「形式主義」に陥り所與的なる社會的實在(素材因)を未だ具體的な個性に於て見て居ない。今具體的な國民精神史觀を確立しこれに基きて各國民社會の社會的歴史的實在をその具體的個性に於て把握するならば、目的因、形相因、動力因の智識もまた個性化されざるを得なる。かくてこの個性的具體的な智識を以て各國民社會の社會的實踐を具體的に基礎付け得ることとなるのである。